

# 概要と総括

同志社大学人文科学研究所

田 中 智 子

2013年9月21日（土）・22日（日）、本誌冒頭のごとく、同志社大学人文科学研究所国際学術シンポジウム「磁場としての東アジア」(全4回)の一環として、「ミッション高等教育史の可能性」と題するカンファレンスを開催した。

人文研の「キリスト教社会問題研究会」（略称CS）は、研究所の共同研究の基幹として位置づけられ、良質な成果を多く生み出してきた。特に同志社や新島襄、アメリカン・ボードの研究や、石井十次・山室軍平・留岡幸助などの社会事業家の研究、そして戦時下の思想弾圧と抵抗運動に関わる研究は広く知られている。本カンファレンスは、これらの研究視角や手法を相対化し、その成果を検証する意味も込めて企画したものである。

スピーカー・司会者には、大学での御所属や所属学会もまちまちの方々がお集まりくださった。それぞれ研究対象とするフィールド・方法論は多様で、自己紹介ともなれば、キリスト教史・アメリカ史・帝国史・教育史・女性史・日本近現代史・植民地研究等々、様々な専攻分野名を口にされるであろう。仲間うちの集会ではなく、初顔合わせが大半で、人文研の本来目指すべき「学際研究」らしいメンバーにお揃いいただけたものと自負している。お互いの研究を尊重し、接点を見つけて、あらたな議論の地平を切り開いていければと考えている。

「ミッション高等教育」とは、ミッションが経営するという意味での「ミッション・スクール」とは同義ではなく、宣教団あるいは宣教師の関わった教育という

広い意味で用いている。また「高等教育」についても、「読み書きを中心とした国民教育としての初等教育よりも高いレベルの教育」全般を指し、一握りのエリートを養成する教育だけではなく、各国の教育制度のなかに位置付ければ「中等教育」と定義されるレベルの学校の営みも含めている。今回の企画は、そうした広義の「ミッション高等教育」の歴史を、三つの視座から取り上げたものである。

1日目（9月21日午後）の第1部「東アジアにおけるミッション高等教育史研究の来歴と現在」は、講演形式のセッションである。中国・朝鮮のミッション高等教育に関わる研究が、いかなる時代背景・関心の下に展開してきたのか、あるいは今日の研究上の争点はどこにあるのか、お二人の研究者にお話しいただいた。それぞれの研究史や個別事象についての知見を得ることで、人文研の研究の視角や手法の相対化を試みることを目指した。進行役は所員の田中智子が務めた。

一人目の講演者は、上海大学からお招きした陶飛亜氏である。『辺縁の歴史-基督教與近代中国』（上海古籍出版社、2005年）、『宗教慈善与中国社会公益』（上海大学出版社、2012年）『中国的基督教烏托邦研究：以民国時期耶穌家庭為例』（北京人民出版社、2012年）、など多数の著作があり、中国キリスト教史学界の重鎮として知られている。二人目は、恵泉女学園大学の李省展氏である。関西に在住された1990年代から朝鮮ミッションの研究に取り組み、単著『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代』（社会評論社、2006年）刊行以来、この方面の研究をリードされている。

2日目（9月22日午前）の第2部「越境する教育事業と「帝国」の時代—キリスト教界・公権力・地域勢力—」は、シンポジウム形式とした。1920年代アメリカにおける「東洋の7つの女子大学」支援活動は、インド・中国・日本に設立された女子高等教育機関7校を対象に、超教派の運動として繰り広げられた。現地におけるネイティヴやイギリス勢力との関係、ロックフェラー財団の関与など、数々の興味深い問題をはらむこの素材は、『アメリカ婦人宣教師』（東京大学出版会、1992年）の刊行以来、日本におけるアメリカ女性宣教師研究のパイオニアと

して活躍中の小檜山ルイ氏（東京女子大学）が着眼されたものである。同氏による基調報告「アメリカ的帝国の形成と女子高等教育の越境」の後、コメンテーターの発言を得た。そして、会場からの質問もふまえた小檜山氏の応答に即して、全体的な討論を進めた。

コメントはまず、*The Meaning of White: Race, Class, and the 'Domiciled Community' in British India, 1858-1930* (Oxford University Press, 2011) などの研究がある水谷智氏（同志社大学）より、インドをフィールドとしたイギリス帝国史の立場から発していただいた。加えて第3部報告者の駒込武氏（京都大学）から、小檜山・水谷両氏に対するコメントを頂戴した。なお第2部司会は、女性史や国民国家の問題に造詣の深い神戸大学の長志珠絵氏にお願いした。

最後の第3部（9月22日午後）「戦時同志社史再考—世界史・地域史のなかの連鎖構造—」は、共同研究報告スタイルのセッションである。人文研がかつて上梓した『戦時下抵抗の研究』（1968年）、『特高資料による戦時下のキリスト教運動』（1972年）、『近代天皇制とキリスト教』（1996年）などは、今なお古典的位置を占めている。一方で、『ミッション・スクールと戦争：立教大学のディレンマ』（2008年）、『遠山郁三日誌1940～1943年：戦時下ミッション・スクールの肖像』（2013年）といった立教大学の試みのように、戦時期校史研究の新潮流も生まれており、研究史の塗り替えが図られるべき時期にきている。

まず、第2部に引き続き駒込武氏にご登場願ひ、「帝国史の視点から」との副題による研究報告をいただいた。広く読まれた氏の代表作が『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）であるが、目下特に台湾に視点を据えて、この間の植民地教育史研究をまとめておられる。今回の報告は、その延長線上に位置する新論考であり、「神棚事件」（1935年）に始まる同志社での思想弾圧事件が、植民地および内地における類似の諸事件や時代状況との連鎖的広がりのおかげで捉え直されている。続いて筆者（田中智子）が、「運営体制の分析から」と題する補助報告を行い、その上で、立教大学の寺崎昌男氏より二報告に対するコメント

を頂戴した。

長年近代日本高等教育史研究を牽引してこられた寺崎氏については、多言を要さないであろう。その編著作は枚挙に遑がなく、第3部司会をお願いした同じく立教大学の奈須恵子氏とともに、立教学院資料センターの運営にも関わってこられた。寺崎・駒込・奈須氏には、『戦時下学問の統制と動員：日本諸学振興委員会の研究』（東京大学出版会、2011年）といった共著もある。

最後は、本誌編集委員長の吉田亮氏より閉会のあいさつがあり、カンファレンスは終了した。

以下本誌に掲載されるのは、この二日間にわたるカンファレンスの記録である。

第1部・第2部の日本語発表については、当日の録音や配付資料をもとにまとめられているが、第1部の英語による陶講演、第3部の駒込・田中共同研究報告については、当日レジメとして成稿が用意されており、論文形式で収録した。第2・第3部における質疑応答や討論の内容は、それぞれの末尾に収録してあるので合わせて参照されたい。

今回の催しの主な来場者は、人文研CS系研究会の構成員であり、4研究会（第1～第4研究）すべてからの参加があった。同時に、戦後思想や植民地主義をテーマとする第5・第6・第10研究メンバーの参加と発言も得られた。各々で完結してしまいがちな人文研の部門研究に、有機的なつながりをもたせる契機としたつもりである。例えば、第3部で議論された同志社理事・評議員のなかに、移民史上あるいは社会事業史上の著名な人物が含まれることが、CS第2・第3研究のメンバーから後日指摘された。このあたりが研究会横断的企画の意義・醍醐味ともいえよう。

なお、翌23日（祝）には、スピーカー有志で、近江ミッションの史跡を訪ねる巡見を実施した。前日紹介された同志社理事吉田悦蔵の旧邸（同志社評議員ヴォーリズ的设计）、あるいは両者ゆかりの近江兄弟社学園校史展示室など、カンファ

レンスそのものと結びつけた見学を行うことができ、有意義であった。

運営に関しては、宣伝・集客面や会場の利便性等、連休中ならではの反省点も残ったが、はじめての試みとして、内容的には満足いくものになったと感じている。全日程の中で、中国・朝鮮・日本・インド・フィリピン・台湾におけるキリスト教勢力の教育事業が取り上げられた。本企画には「磁場としての東アジア」との共通テーマが与えられていたが、単純に日中韓の比較を行えばよいわけではなく、「伝道」と「帝国」の広がりの実像にそくして、考慮すべき地域を浮かび上がらせ、具体的事例から全体史を目指す姿勢は共有できたものとする。資金と管理運営の問題、あるいは「リベラリズム」といったキーワードなど、共通の論点も析出できた。とはいえ、明確になったのは、多くの論点に関して、本格的な研究はこれからだということである。同志社は、その拠点となりうる／ならねばならない自己の歴史と環境、潜在能力を秘めた場なのではなかろうか。本カンファレンスの成果を今後も発展させ、「CSの可能性」の追求につなげていきたい。